

大阪学院大学  
外国語論集

第 83, 84 号

Monica Sone *Nisei Daughter* の背景  
—Betty MacDonald との友情をめぐる—  
…………… 永岡規伊子 1

研究ノート  
Truman Capote の “A Christmas Memory” について  
—作品の魅力と文体的特徴—  
…………… 松永大介 25

2022 年 12 月

大阪学院大学外国語学会



大阪学院大学  
外国語論集

第 83, 84 号

2022 年 12 月

大阪学院大学外国語学会



# Monica Sone *Nisei Daughter* の背景 —Betty MacDonald との友情をめぐって—

永 岡 規伊子

## はじめに

アメリカ西海岸で東洋人への差別、とくに排日の運動が厳しさを増していた時代にモニカ・和子・糸井(1919-2011)は、日系二世としてシアトルで生まれた。ミニドカ強制収容所(Minidoka Relocation Center)の体験を経て、戦後カリフォルニア州出身の同じ日系二世のゲーリー・マサミ・曾根と27歳で結婚し、モニカ・ソネとして1953年にこの自伝が出版された。3男1女のうち、娘である二人目の子どもの母親となった34歳の時であった。

人種とジェンダーという二重の差別を想起させる *Nisei Daughter* というタイトルで、自らの半生を正確に記録し、また細やかな心の動きを正直に感性豊かに描写したこの作品は、1920年代から終戦までのアメリカ日系社会の証言となる資料として、歴史や社会学的な研究に貢献してきた<sup>1</sup>。Wongによると、これは1950年代のアジア系アメリカ人による数少ない出版物の一つであり、とりわけ強制収容所の体験を女性の視点から明らかにされた最初の一冊であったという<sup>2</sup>。またその過酷な現実にもかかわらず温かいユーモアと客観的な観察・深い洞察をもって描かれていることから、当時アメリカの主要紙で高く評価された<sup>3</sup>。その後、1976年に日系人の強制収容が国家の過ちであったとアメリカ政府が初めて認めたことをきっかけに<sup>4</sup>、この作品は再び脚光を浴びてワシントン大学出版局より1979年に再版されている。また二つの異なった文化の間で育つ移民二世という、アイデンティティの獲得がきわめて困難な状況で、しかも市民権を持つ祖国アメリカで敵国人とみなされる苦難の中にあっ

て、自己を確立していく苦悩と成長の様子が克明に語られていることから、これまで文化的同化の観点から多く論じられ、多文化研究や文学研究のテーマを与えてきた作品でもある<sup>5</sup>。

そのような学際的な研究の蓄積の中で、モニカ・ソネと一人のアメリカ人女性作家ベティ・マクドナルド（1907-1958）との交流について、筆者の知る限りでは、これまで取り上げられたことはなかった。*Nisei Daughter* が完成間近だった1951年に、日本の婦人雑誌の編集長宛てに送られたベティ・マクドナルドの手紙と、翌年それに応じる形で同じ雑誌に寄稿されたモニカ・ソネの手記を手掛かりに、この作品が出版に至った事情と二人の作家の影響関係について明らかにし、*Nisei Daughter* の新たな読みの可能性を考えたい。

### 1. *Nisei Daughter* のクリスと *The Plague and I* のキミ

自伝として一人称で語られる *Nisei Daughter* において、作者であり主人公であるモニカ（作品の中では日本名で Kazuko, Kazu, Kazi, Ka-chan と呼ばれる）はシアトル郊外のサナトリウム（結核療養所）で同じ病室になったクリスとの出会いを次のように描いている。モニカは療養所で18歳の誕生日を迎えていることから1937年の出来事である。

（病室の）3つ目の隅にいるクリスは、明るい赤褐色のふわふわした髪をしていた。よく笑い、そのさわやかなユーモアは単調な日常生活を吹き飛ばしてくれた。私はクリスの心を分析してみようとしたが、どうしてこんなに快活になれるのかが理解できなかった。（*Nisei* 138）

そして *Nisei Daughter* と同様、自伝文学として知られる *The Plague and I* (1948) でも、語り手であり主人公であるベティは若い日本人女性キミとの出会いを次のように印象深く描いている。

（病室の）北西の隅には小さな日本人の娘がいて、華奢な淡褐色の両手をじっと胸の上で組み合わせていた。彼女はキミ・サンボウ (Kimi Sanbo) という名前だった。まっすぐで豊かな黒髪を真ん中で分け、きっちりした後

ろに引き詰めて青い櫛で留めていた。くっきりした黒い眉毛はこめかみに届き、黒い瞳がボタンホールのように大きく、鋭く光っている。頬はつややかなピンク色をしていた。彼女は静かに黙っていた。(Plague 45)

このように互いの作中人物として仮名で紹介されるクリスとキミこそが、ベティとモニカであることが、『婦人朝日』に載せた二人の手記から以下のように明らかにされる。

ベティは、「多分貴誌の読者達は『病氣と私』に出て来る日本女性キミが非常に幸福な生活を送り、大変な成功をしたことに興味がおありと思います。キミの本名はイトイ・カズコといましたが、現在ではソネ・カズコです」(ベティ 68)と書いている。そしてモニカは、「ベッティ (マクドナルド夫人) と識り合ったのは、あるサナトリウムに入った時のことで、そのころ私は十八歳のおずおずした娘だった」(モニカ 98)と語るのである。これらの手記は、*Nisei Daughter* と *The Plague and I* という二つの自伝作品と関連し、その世界を補う重要な資料と言えるだろう。

## 2. モニカとベティの友情と *Nisei Daughter* 出版の事情

ベティ・マクドナルドは、サナトリウムでの経験から8年後に出版した *The Egg and I* (1945年) が発売1年で100万部を売って一躍有名になった作家である。他にも、前述の *The Plague and I*、*Anybody Can Do Anything* (1950年)、*Onions in the Stew* (1955年)、とタイトルからもわかるように、いわゆるノンフィクション作品として自らの日常生活を明るいうーモアで描いている<sup>6</sup>。また自分の娘たちに話して聞かせた童話を *Mrs. Piggie-Wiggle* というシリーズで出版している。

ベティの名は日本でも知られるようになって<sup>7</sup>、『婦人朝日』が1951年の新年号に彼女のメッセージを載せたいと依頼した。しかし依頼の手紙が彼女の手へ渡るのが遅れて、メッセージを寄稿できなかったお詫びに雑誌編集長宛てに送った手紙が、そのまま同年7月号に載せられたという経緯であった。

モニカは手記の中で、旧知の友であったベティがこのように作家として成功したことに歓喜し、「ベッティの『卵と私』が出版されて全米をアツといわせたのはそのころだった。私は彼女がずっと前から物を書いていたのを知っていたので、狂いようになって喜んだ」(モニカ 99) と振り返っている。

実際モニカは、「以前私はサナトリウムでの経験を題材としたベッティの原稿の下書きを読んだことがあった。この本はそのころこの出版社でも肺病のような陰気なことを書いたものは誰も読まないと判り切っているといつて、相手にしてくれなかったものだ」(モニカ 99) と書いている。そして戦争によって二人が会えなくなつてからも、長年にわたつて文通による交流は続き、モニカの手紙に書かれた戦中・戦後の苦難の日々を綴つた文章をベティも読んでいた。

そして、「私自身もある日アトランティック・マンスリー出版社から、米国における二世の経験について本を書いてみないかといわれ愉快的驚きを感じたのであった。これには何か不思議な方法でベッティが介在していることが私には判っていた」(モニカ 99) と出版の事情が述べられる。モニカのユーモアのセンスや文章の才能を知っていたベティが、自分の本の出版社にモニカを紹介したのであった。そのことについてベティの手記ではこのように詳しく説明されている。

カズコと私はしょっちゅう文通しておりますが、彼女の手紙がとても才気があって面白いので、ある時、その一通をアトランティック・マンスリー出版社の編集者に見せて、『カズコは物が書けると思うけど、どう?』とたずねました。その編集者は、この人は物になるといつたばかりでなく、こちらから出掛けて行って何か手始めになるようなものを書かせなければならぬ、といつて本当に出掛けて行きました。彼女が書き始めた本はもう二章ばかりで出来上がりますが、アトランティック・マンスリー出版社の編集者は、その本の成功に最大の期待を持っています。カズコは私のエージェント(代理業者)の顧客として受け入れられましたが、私のエー

ジェントは文学方面では最高のエージェントですし、私の知っている限りでは、これまで何年もの間、一人も新しい顧客を受付けていなかったのです。(ベティ 68-9)

これらの手記からわかるのは、第一に、ベティの仲介によって、アトランティック・マンスリー出版社の編集者に勧められて執筆されたのが *Nisei Daughter* であったこと、第二に、求められた内容が「アメリカにおける二世の体験」であったことである。このことは、戦後の早い時期に日系二世の収容所での体験が出版されるという異例の事情を説明してくれる。そして、第三にベティの手記に記された編集者のモニカへの高い評価は、彼女の才能を証するものである。また同時に、女性による自伝が当時アメリカだけでなく多くの国々で翻訳されて大きな反響を呼んだ背景を考えると、ベティの自伝に匹敵するような女性の自伝がモニカに期待されていたことがわかる。

### 3. サナトリウム時代の二人の交流がモニカにもたらしたもの

この二人の交流が実人生で影響を及ぼしたことは、当然のことながら、自伝作品の中でも描かれることになる。作品世界の主人公のアイデンティティの模索が *Nisei Daughter* の主要なテーマであるが、モニカの間人形成に影響を与えた多くのエピソードの中でも、サナトリウムでのこの二人の出会いが大きな意味を持つ。

その重要性が窺えるのが *Nisei Daughter* の次の場面である。

療養所で、私は仲間と歩調が合っているわけではないことに気づいた。アメリカナイズした自分に自信があったので、このようなずれを感じるのは少しショックだった。父や母よりずっと上手に英語を話すことができたし、血のように赤いマニキュアや濃い紫色の口紅をつけることに何の躊躇もない、そんな鼻高々の私は両親を不快にさせたものだ。しかし、ここでは私は自信を失い始めていた。(Nisei 139)

日系コミュニティの中では自身をヤンキーと自認するモニカだったが、初めて

独りで「本当の」アメリカ人と寝食を共にした時、気後れしている自分に「自信を失う」。しかし、それから9カ月が経ち、退院を目前にしたモニカは次のように語る。

一瞬、泣くべきか怒るべきかわからなかったが、彼女たちが温かい愛情をこめて私を見ているのを見ると、突然気が楽になった。クリス、ローラ、アン、エレインと他の仲間は、そのままの自分で仲間に受け入れてくれたのだ。私の外観が違い、少しおかしなことを言ったり、したりしても彼女たちが気にしなかったのは、基本的に私たちはお互いが好きだったからだ。人生で初めて、私は自分自身であることに本当の幸福を感じた。

(Nisei 143)

ここに至るまでには、モニカが自分自身を発見する大きなきっかけとなる、サナトリウム内でのエピソードが語られる。それは、初めて会うローラに対してフレンドリーではなかったとクリス(=ベティ)に指摘される場面である。ローラに向かって精一杯笑顔を浮かべていたモニカには、クリスの言う意味がわからない。しかし、後に日系人のナミとマリーが自分に同じような態度を見せた時に、それが日本人の礼儀正しさと、裏を返せば堅苦しさであって、アメリカ流の親しさを表す態度ではなかったことに気づくのである(Nisei 140-1)。

日本への旅でモニカは「本当の」日本人ではないことに気づかされたが、サナトリウムというアメリカ人社会の中では「本当の」アメリカ人ではなく、むしろ知らず知らずのうちに身についた日本人らしさが、心の奥底にあることを知る。しかし、その「外観が違い」、「少しおかしなことを言ったり、したり」する、芯が日本人である自分を受け入れてくれる友達がいることも同時に知ることになる。「人生で初めて」そのままの自分でいいという「本当の幸福」を感じることができたのは、二世の自分探しにとって大きな出来事だっただろう。そのことをより具体的に語られるのが、以下のモニカの手記である。

私がおずおずしていたのは肺病なんかになったからであり、白人達の真中にほおり出された唯一人の日本人だったからでもあった。本当にこれ以上

不幸な境遇は考えられなかった。

私がそれまで住んでいたワシントン州シアトル市の小さな日本人社会では、肺病になればもう満足な一生は送れないものと思われていた。それで私も仕方がないから死ぬつもりにすっかりなって、重い足をひきずってサナトリウムに向ったわけだ。その上なおさら困ったことには、白人達とこんなに一緒に暮らすのは生まれてはじめての経験だった。それまでずっと私は日本人社会の生活しか知らなかった。学校では白人と二世の両方のお友達があったが、放課後は二世としかつき合わなかった。また私は普通の小学校の放課後に別の日本語学校に通い、教会も日本人のメソジスト教会に行っていた。ところで日本人は経済的に白人農民達の手強い競争相手だというのが一つの理由で、西部海岸地方ではあまり評判がよくなかったのである。

療養所では私は借りて来た猫のように大人しくして、誰もあら捜しなどできないようにする決心をした。日本人の血統なのが何だか自分でも恥ずかしくなりそうな気持だった。けれども、ある日ベッティ・バード（後のマクドナルド夫人）が私と一緒にの室にしたいと看護婦長に申し出てからというものは、私には片隅で目立たないように死んでいく暇がなくなったし、それにふさわしい雰囲気も消えてしまった。ベッティが私を選んだのには誰もがショックを受けた。婦長さんにも、又ベッティが選んでよかった他の二人の女性にも、それから誰よりもまず私自身にとって、本当に意外だった。何しろそれまで東洋人と同室したいなどといった人は一人もいなかったのだから。…その後九ヵ月間私達は一緒に暮したが、その間にベッティは私が逃げ込もうとした殻を完全に破ってしまった。それとなく色々な方法で彼女は私に日本人の生れであることを恥じるいわれのないことを教えた。私たちは日米両国の政治関係についても話をしたけれど、別にお互いに摺み合いの喧嘩もしなかった。自分自身が非常な芸術家であったベッティは日本の美術と絵画を大変愛好していた。全快して退院できるよ

うになったころには、私は自分でも全く人が違ったように感じていた。健康を取り戻したのはもちろんだが、もっと有難いことには、自信と頑丈な神経を手に入れていたのだった。私が米国生まれの権利を持っていることと日本人の血統であることが、はじめて渾然と一つに融け合ったのであった。(モニカ 98)

下線で示したように、ベティと一緒にいた9カ月の間に、モニカは自らが作っていた心の殻を破られ、日本人であることを恥じる気持ちはそれを誇る気持ちへと変えられる。日本人の血統を持つことと、アメリカ人の権利を持つことは矛盾しないという認識に至るのである。

では、そこに至るまでの彼女が抱えていたアイデンティティに関わる問題とは何だったのかを、幼少時にさかのぼって辿っておきたい。

#### 4. モニカの生い立ちと分裂した自己

モニカは幼い頃の思い出を次のように振り返る。「自分が植物なのか動物なのかもわからないアメーバのように至福の世界に生きていた」(Nisei 3) 彼女が6歳になった時のことである。

母は私たちが日本人だと教えた。私はずっとヤンキーだと思っていた。なぜなら私は何とんでもオクシデンタル通りとメイン通りの交差するところで生まれたのだから。ホテルに住む…モンタナは私をヤンキーと呼んだ。なぜヤンキーであり、同時に、日本人であるのかがわからなかった。二つの頭を持って生まれたようなものだった。それは奇妙で面倒なことのように思えた。何よりもまず、日本人学校に行きたくなかった。(Nisei 18-19)

モニカの両親はともに栃木県出身で、父・糸井誠三は、足尾銅山の鉱毒で被害に遭った村の村長・糸井藤次郎の息子で、母・弁子も、足尾鉱毒事件で闘って投獄された後、牧師となってアメリカでの伝道に渡った永島與八の娘である<sup>8</sup>。法律を学ぶ志を持って渡米した誠三は、肉体労働では学資を貯めることが叶わず、結婚したばかりの弁子と一緒に小さなクリーニング店を営業した後

に、シアトルのウォーターフロントに昔から建っていた労働者向けのホテル経営を始めたのだった。ホテル内に一家は住んでいたが、その住まいの「台所には紛れもなく東洋人が住んでいる痕跡と匂い」があり、「6組の赤と黄色の塗箸と醤油の瓶」、「あざやかな手描きの茶碗、赤い漆塗りの汁物椀、そして母が大事にしている相馬焼の茶器」、「食糧庫には、米袋と1ガロン瓶入りの醤油」、「5ガロンの甕から発する独特の鼻にツンとくる匂いがするキュウリ、ナッパ、ダイコンの漬物」があった (*Nisei* 12)。そして天皇の誕生日を祝う「天長節」 (*Nisei* 66) の式典に出席するのが義務づけられ、毎年6月に行われる「ウンドウ・カイ」と呼んでいた日本学校のピクニック (*Nisei* 71) と、お正月の「カルタという日本の昔のゲーム」 (*Nisei* 80) を楽しみにしていた子ども時代に、モニカはそのような目に見える生活や習慣だけでなく、日本的な感性を身に着けて育つことになる。

しかし、日本への旅行中には、父母の故郷や親戚の人々の様子を心に刻みながらも、村の子どもたちに「アメリカ・ジン！」とはやし立てられ (*Nisei* 97)、「異邦人であると感じ」た (*Nisei* 108) モニカは、約4カ月に及ぶ旅を終えてシアトルの港に帰還する。赤痢に罹った弟のケンジを亡くし、一命を取り留めた兄のヘンリーが回復した後のことだった。その時の様子を彼女はこのように記している。「突然、私は重い胸のつかえがとれたような気がした。再び家に帰ったことを実感し、日本への旅は、悲しい魔法にかかった夢のように、背景へと遠ざかって」 (*Nisei* 107) いく。そして、「これが私の家、美しいピューージェットサウンド港が私たちの前に広がっていた。…異なった人種のルーツを持つ人々に囲まれて、私が生まれたこのアメリカ、それでもこれが私の故郷だ」 (*Nisei* 108) と認識する。「本当の日本人に会う」という、その章のタイトルが示しているように、自身が本当の日本人ではなく、アメリカ人なのだという自覚を強く感じる旅となる。

だが、その祖国であるアメリカで日本人排斥が激しくなり、妹・スミコ（サミー）の喘息の療養のため、保養地の貸家を探していた時に、「ジャップ」に

は貸さないという露骨な差別に初めて晒されることになる。大きなショックを受けたモニカに、クリスチャンである母・弁子は、「自分に誇りを持つことを学んでほしい。それは白いから、黒いから、黄色だから、ではなくて、同じ人間なのだから。そのことは絶対に忘れないで。誰に何を言われようとあなたは神様の子どもの」と諭す。しかし彼女は、「でもママ、日本人だっていうのはそんなに悲惨なことなの？」(Nisei 114)と涙を流し、「一日中私は、自分に流れる日本人の血について反抗的な気持ちと擁護する気持ちの間で引き裂かれていた。しかし、あの女性の突き刺すような言葉を思い出すと、ひりひりと痛む怒りの炎が血管を走って爆発しそうだった」(Nisei 115)と語るように、自分たちが受けているスティグマを実感する初めての体験となる。さらに、「徐々に日本人の血を引いていることに恐ろしい災いが伴うことを他のいろいろな点で知ることになった。国家が進む方向に、国民も進むものだ。日本と合衆国はもはや意見を同じくしてはおらず、日々のくらしにも影響が出ているのを感じていた。日本の軍隊が突然上海に侵入した時、国際事情は悪くなった。市の職員や著名な人々がインタビューを受けると、みな日本の商品への制裁と不買運動を叫んだ。人々は行きつけの日本人の店に行くのを止めた。日本人に雇われていた中国人は次々と仕事を辞めた」(Nisei 118-9)、という社会情勢に呑み込まれていく。そのような中で、ワシントン大学に進むことを夢見ていたモニカは、日系人が、とくに日系人女性は仕事を得るには職業専門学校に行くしか手がないこと、しかしそれでも就職の当ては限りなくないに等しいことを屈辱的に告げられる。モニカは大学で友達に追いつくことを目指して努力し、専門学校の2年過程を1年で終えてようやく大学に通えることになった頃の結核発病だったのだ。

## 5. モニカとベティのつながりの原点

先に述べたサナトリウムでの出会い以降の二人の友情と信頼関係は、*Nisei Daughter* の中でも触れられている。真珠湾攻撃後、日系人排斥の運動がいよ

いよ激しくなって一家が日本に関連するものをすべて焼き捨てざるを得なくなった時に、モニカが日本人形をクリスマスに預ける場面 (*Nisei* 155) や、ぬかるみだらけのピュアラップ仮収容所 (Puyallup Assembly Center) でクリスマスに長靴を差し入れてもらう場面 (*Nisei* 180) である。

二人に12歳の年齢差がありながら、そのような友情に結ばれるに至った背景には、当時は死を意味した結核という感染症への恐怖と共に体験し、病を乗り越え、また *The Plague and I* に詳しく描かれているように、退院した後も結核感染者に対する偏見と病気から復帰する苦しさを一緒に乗り越えてきた思いがあっただろう。しかし、そのような状況だけでなく、二人には何よりも互いを高め合う共通した価値観と資質があったに違いない。それらをモニカの *Nisei Daughter* と手記、そしてベティの *The Plague and I* に描かれる互いの人物評から読み取りたい。

まず、モニカは *Nisei Daughter* と手記の中でベティについてこのように記している。

私は彼女の素晴らしいユーモアと生きることへの抑え難い熱意に触れずにはいられなかった。私が沈んでしまった自己憐憫の穴から、明るい日差しに少しずつ誘われていくように感じた。毎朝クリスマスは『おはようございます』という日本語で、私の意識もうろうとした眠りを破り、主任看護師がまた何か怒っているわよと私に注意した。 (*Nisei* 139)

有名になってもベティの人柄は少しも変わらなかった。彼女はやはり前と同じように他人を助けることを考えていた。一生を通じて働きかつ闘って来たベティには、バラバラになった生活の断片を一つ一つ縫ぎ合せて更生の第一歩を踏み出そうとする西部海岸地方の日本人の苦労がよく判った。ベティは自分の農園を日本人達に貸し、その時もまたその理由として日本人が農民として一番有能だからとってくれた。…多くの人々にとってはベティ・マクドナルドは一夜にして成功したようにみえるかも知れない。けれども私はそれがそうではないことを知っている。今日有

名なベッティ・マクドナルドは、私の憶えている最初にサナトリウムで会った時、すでに成功に必要な条件—素晴らしいユーモアの感覚、深い温かい心、そして夥しい勇気—を備えていた。肺病と取り組む勇気、人間としての待遇を受ける日本人の権利のために闘う勇気、そして常に自分を見失わない為に必要な勇気を彼女は持っていた。後に彼女の得た物質的成功はただその当然の結果としか思えない。(モニカ 99)

一方、ベティのモニカへの賛辞は *The Plague and I* の中でこのように記されている。

優しく聡明で、思いやりがあり機智に富んだ、美しいキミと同室の友になれたことがどんなに幸運であったか、そのことを私は何度も何度も思い返した。(Plague 74)

残念なことに、財産や仕事を取ってしまうと、安物のゴルフボールのようになってしまう人があまりにも多すぎる。少しずつ解いていっても、純粋なゴムの芯に行きつくことはない—そんなものは初めからないからである。ところが、キミの場合は、解き始めるとすぐに彼女の美しい外皮の下が大部分芯であることがわかった。「ねえベティ、それは何もあたしの人格のせいじゃないのよ。ただ、もし結核にかかるんだったら、日本人である方が耐えやすいというだけのことだわ。」(Plague 75)

彼女と同室してみてわかったのは、二人は知性の点では互角だが、感情の点では彼女の方が優れている、ということだった。私が彼女に勝っているのは経験だけだった。それは間違った見方だと彼女は言った。そう見えるのは彼女が日本人だからというだけのことで、なにも質問しないで服従することに慣らされているからに過ぎないと言った。(Plague 125)

以上の *The Plague and I* に描かれた、ベティの賛辞に対するモニカの応答に注目したい。下線に示したように、ベティが指摘するキミ(=モニカ)の優れている点を、モニカは日本人の特質だと説明するのである。もちろんそこには日本人の我慢強さや服従の精神を揶揄するニュアンスもある。また、褒められ

たことに対する日本人特有の謙遜の気持ちが表れているかもしれない。しかし、ベティの指摘によって、日本人らしさの良い点をモニカはここで新たに自覚するようになったのではないか。また、先の引用の下線で示したように、ベティが自分の農園を日本人達に貸すのは、「日本人が農民として一番有能だからとってくれた」(モニカ 99) ことも、モニカの日本人への理解を深める大きな要因になっただろう。

さらに、黒人を蔑む発言を聞いたキミ (=モニカ) は、人種差別に対して堂々と挑んでいく面も見せている。チャーリーという回復期の患者が、「もう長くは持たないやつが一人いるんだ。…ああいったニガーは結核には抵抗する力がないってことさ」と言うと、女性患者のアイリーンが「ニガーなんかと一緒に風呂に入りたくないわ。ニガーって、いやな匂いがするんですもの」と言ったという文脈でのキミの発言である。「日本では (They Japanese) 白人は匂いがすると思っているのよ」と言う。それに対して、アイリーンに「ジャップが白人と違う匂いがするっていうの？」と詰め寄られても、キミは毅然として、「わたしたち日本人 (We Japanese) は全然匂いがしないというのがわたしたちの意見 (our opinion) なんです」(Plague 84-5) と答えるのだ。

このように、キミ (=モニカ) の発言には、人種問題で引っ込み思案になり日本人であることを恥じて殻を作っていた入院当初の姿はない。彼女は、自分の中にある日本人の気質が優れている点であるとベティに指摘されることによって、自分をありのままに肯定するきっかけを見出す。「彼ら日本人」という第三者の立場ではなく、「わたしたち日本人の意見」だと誇りをもって言えるようになっていくのだ。

そして、キミは人種差別だけでなく、社会の男性優位についても次のように指摘する。

キミはいつもの小さい、高い声でいった。「わたしが今まで観察したところでは、この世のなかのことはすべてにおいて、男の人のほうが恵まれているわ。このパイン・サナトリウムにしても、男性用の安静病棟では、

男の人は入院したその日から、すべての日刊新聞を読むことができるのですもの。」シルビアが「男性は女性より強いから安静にする必要がないのよ」と言うと、キミはこう反論した。「それはおかしいわ。院長も男性だからよ。院長はきっとこんな風に考えているのよ、『女の心はちっぽけなものだ。女なんてものは、一日24時間30日連続で、つまり合計720時間、何もしないで横になっていることができる。だが男の心は大きいので何か考えるものを与えてやらなければならない。だからすぐに新聞を読むことを許してやろう』ってね。」(Plague 52)

*Nisei Daughter* には、このようにモニカのジェンダー意識を直接的に語る場面はない。しかし、女性は仕事がなくとも結婚すればよいとばかりに縁談を持ってくるマツイ夫人に対して突然モニカが笑いだす場面 (*Nisei* 136) などに、彼女のジェンダー意識と自立を目指す意志を読み取ることができる。最初に述べたように、このタイトルは二世であり娘であるという二重の足枷を暗示しているように思われるのである。

## 6. *Nisei Daughter* の新たな読みの試み

1979年版の序文で、モニカ・ソネは、「日系人は（その時行われていたアメリカ政府への）補償運動によって他の民族への同じような不正義が止むことを願っている」と書き、民主主義社会の責任と公正な正義が行われることの大切さを訴える言説の引用で閉じている<sup>9</sup>。これは Wong も指摘しているように、*Nisei Daughter* の抑制した語りには見られない、主張を込めた熱い口調である<sup>10</sup>。しかし、彼女の考え方そのものが、作品の発表後四半世紀のうちに当然深化したとは言え、変化したとは思えない。これまで示してきたように、*The Plague and I* に描かれる18歳のモニカに、日本人差別だけでなく、あらゆる人種やジェンダーによる差別に立ち向かう方向性がすでに見られるからである。

もちろん文学作品はそこに書かれたもので評価されるべきであるが、そのような別の角度から見た作者像を知ることによって、作品に隠された意図やメッ

セージを読み取ることができるという点で、本稿で取り上げた二人の手記とベティの作品を新たな解釈の糸口とすることは有効であると考ええる。

その試みの一つとして取り上げたいのが、以下の *Nisei Daughter* のエンディングの言葉である。

私は相変わらず東洋人の目をしてはいたが、これまでとは全く異なった展望を持ってアメリカの本流の生活に戻ろうとしていた。今や私は、悲しくも二つに裂かれた人格を持つのではなく、一つにまとまった人間になったと感じていた。自分の中の日本人の部分とアメリカ人の部分が融合したのだ。(Nisei 238)

アメリカ社会への同化を示すと評されるこの言葉は、これまで楽観的過ぎるという評価が多くなされてきた。例えば、辻は白人優越主義のアメリカにモニカがモデル・マイノリティとして吸収されたと結論づけ、Yogi は当時は多くの日系人がアメリカの主流に同化しようと試みていた時代であったと指摘し、物語のエンディングの言葉は驚くことではないと述べている。それとは対照的に Sumida は、モニカが当時の流れとは反対に、日系であることを肯定して多文化主義を提唱していると論じている。ただ最後の言葉だけがショックを受けるほど同化主義者の決まり文句となっていて、Sumida は日系三世である自分としてはその箇所は批判的に読みたいと述べる。

ここで書かれている「アメリカの本流の生活」に戻るというのは、収容所に隔離されることによって、「アメリカの一般社会から遠ざかり、脇に置かれ、周辺存在になった」(Nisei 198) 生活から解放されて、「1943年までには、二世は人生の本流に戻ることができた」(Nisei 216) ことを意味する。しかし、モニカは立ち退きによって姿を消したシアトルの日系コミュニティに戻ることはできない。それは、当時立ち入りを禁止されていた西海岸に戻るのではなく、アメリカ東部で独り働きながら大学で学ぶ新しい生活である。この時、彼女は初めて日系社会を出て、サナトリウムというアメリカ人社会に「放り込まれた」6年ほど前の体験を重ねて思い起こしていたことだろう。

サナトリウムに入った頃のモニカを振り返ると、アメリカの文化や価値を身につけつつも、日系人コミュニティで培われた日本人の精神を内面化しており、「本当の」アメリカ人ではない自分を自覚していた。それは、ブロードウェイ高校に入った時に、クラスで自分の意見を述べるように求められても、日系の生徒は「岩のように座っていた」という回想にも表れている。モニカはそれが「日本人だったから」と述べ、「大失敗を大声で晒すよりも、静かにして愚かに見える方が良いと感じる」日本人を「沈黙する国民」と考える。そして、的外れであっても「自分の意見を聞いてほしいと叫ぶ仲間の学生を羨ましく思い」、「赤いトマトのように顔を火照らせることなく最も簡単な意見をクラスで言うことができるようになったのは、長い苦しい闘いの後だった」(*Nisei* 131)と述懐する。

そのような「日系二世」という立場で、自らのアイデンティティを見出すための苦悩を背負い、しかも通常の移民とは異なって、敵国人としてヘイトの対象になっていたために、自分の中の日本人をより意識せざるを得ず、それを恥じて殻にこもっていた。先に引用したように、自我が目覚めた頃の「ヤンキーであり、同時に日本人である2つの頭を持つ」自分への幼い戸惑いは、青年期になって、「日本人の血について反抗的な気持ちと擁護する気持ちの間で引き裂かれる」葛藤となる。作品の最後の言葉はそうように背負ってきた、「悲しくも二つに裂かれた人格を持つ」自分を指す。そして先に述べたように、ベティとの出会いを経て、モニカは自分の中の日本的なものを肯定し、そのままの自分で良いという「幸福感」と自信を得ていた。

それでも、ベティとの出会いの後の戦争前夜や戦争中の収容所において、モニカの心は何度も揺れ動く。日系人にとって信じがたい真珠湾攻撃のニュースを聞き、「古い傷口が再び開き、今や敵となってしまった日本人の血を持っていることで、内に逃げ込もうとしている自分に気づいていた」(*Nisei* 145)と語られる通りである。しかし、仮収容所となったキャンプ・ハーモニーで、モニカの人生にとって重要となる以下のようなもう一つの出会いの時が訪れる。

日曜日は、感情を隠して忙しく仕事をする事から解放されて、一旦立ち止まる日になっていた。午前中は、毎週日曜日に訪ねてくれるエベレット・トンプソン牧師の話を書くために教会に行った。…野球場の正面観客席の下のチャペルとして使われている薄暗い仮設の部屋に、私たちは打ちのめされた心で集い、説教と祈りのたびに心を新たにされた。牧師は、私たちが少しずつ新しい視野に立って生きていく拠り所を築く助けとなってくれた。彼が詩篇の一部を声を揃えて読むようにと言った、ある日曜日の礼拝を特に覚えている。私たちの状況と環境の中であって、聖書の一節に新しい意味と慰めを見出そうと、ゆっくりと注意深く読み始めた。…

私たちがこれらの行を読み終えた時、…囲んでいた壁が押し戻されたかのように、その部屋は平和と畏怖に満ちており、私たちは自由になった。キャンプでのこの生活は私たちの人生の終わりではなく、ほんの始まりに過ぎないということを確認した。…私たちの最大の試練は精神的なものであることがわかった。現実の、また想像上の偏見について、私はこれまでずっと神経を尖らせ、怒り続けてきた。立ち退きは最大の打撃だったが、人々に裏切られたと苦々しく思っても冷笑しても、何も得られるものはなかった。私たちが望んでいる生き方を築くために、自分自身の魂を見つめ、神への信頼を持ち続けることがより重要な時が来ていた。(Nisei 185-6)

強制収容所という極限の試練の中で自身の内面と対峙し、神への信頼を深めたモニカは、自らの生き方を問い直し、正義と平等の意識を強くする。そのように得た平安と希望は、次のような新たな自分の発見と未来への期待へと導く。

それまで、私にとってアメリカとは、美しいシアトルの街であり、小さな日本のコミュニティであり、そして自分自身になるための必死の闘いを意味していた。私は今や過去を脱ぎ捨てていたので、ハイフンで繋いだ日系・アメリカ人の気質を引き裂くのではなく、それに力を与えてくれるアメリカの別の側面を知ることができるかもしれないと期待していた。(Nisei 216)

自分は何者かという問いに対して、モニカはエスニシティを持ったアメリカ人として生きる権利を有する人間であるという解答をここで改めて確認したと理解できるだろう。先に挙げた、「一つにまとまった人間になったと感じ、…自分の中の日本人の部分とアメリカ人の部分が融合した」という作品のエンディングはその延長線上にある。しかも、そのエンディングが書かれたのは、モニカが1952年に『婦人朝日』に宛てた手記に「米国生まれの権利を持っていること」と「日本人の血統であることと」が「はじめて一つに融け合った」と書いていた頃に重なることに注目したい。これらを重ねて読むことによって、このエンディングは日本人の部分を保ったままでアメリカ人として生きていくという揺らぎのない自己肯定を指していると読むことが可能と思われるのである。確かにモニカは、一世の人々から伝えられた日本の文化と同時に、生まれた国であるアメリカの価値や文化を吸収してきた。しかし決して一方に吸収されたのではない。

これは、後の序文での強制収容を不当とする人権運動の発言につながるものである。*Nisei Daughter* は、ユーモアを散りばめて淡々と穏やかにではあるが、モニカ・ソネの主張が静かに語られた作品と言えるのではないだろうか。

#### おわりに

*The Plague and I* で、入院中にすでに「キミは精神医学を研究しようと決心した」(*Plague* 208) と書かれている。*Nisei Daughter* の終章では、ワシントン大学では文学を志していたが、ウェンデル・カレッジで音楽、歴史、時事、宗教、哲学、社会学への興味を経て、最終的に人が好きなことから心理学に絞られ、臨床心理に進むことになったと述懐する。

モニカはその決意の通り、ケース・ウェスタン大学で臨床心理士の修士号を取得し、臨床心理士として、またカトリック・コミュニティー同盟でソーシャル・ワーカーとして歩んだ。キミがサナトリウムでの同室の友人に「悲しまないで。私たちはあなたの友達だし同じ思いでいるわ」と言うのを聞いたベティ

は、「キミの語る言葉はいつでも、羊皮紙の片隅に桜の小枝か一輪の菖蒲を描くような響きを持っていた」(*Plague* 77)と書いている。差別と偏見を体験し、自らの心と向き合い続けた経験は、今度は他人の心の声を聴く仕事へと導いたと思われる。また、モニカの言葉が一輪の花を描くようだと言っているが、それは *Nisei Daughter* の風景や心象の描写にも共通するものである。母・弃子の詠む短歌がこの作品で紹介され、またその文体を家族がからかう場面がユーモアと愛情を持って描かれているが、モニカの感性にも、歌人・詩人であったその母（ペンネーム・糸井野菊）の影響が現れているのは明らかである<sup>11</sup>。

92歳で亡くなったモニカ・ソネの追悼記事では、二冊目の本を執筆中だったという<sup>12</sup>。二世としてのその後の歩みが記されていたであろう未完の原稿には、ベティとのその後の交流が豊かに描かれていたと思えてならない。

#### 注

\*本文中の引用は主に参考文献の最初に挙げた4つの文献からであるが、ページの前に以下のように略して示した。また引用中の下線はすべて筆者による。

*Nisei Daughter (Nisei)*、*The Plague and I (Plague)*

モニカの手記（モニカ）、ベティの手記（ベティ）

\**Nisei Daughter* は、An Atlantic Monthly Press Bookとして、Boston: Little, Brown and Company から1953年に出版された。その後、Monica SoneのPrefaceとFrank S. MiyamotoのIntroductionを加えて、1979年にUniversity of Washington Pressから再版された。2014年版には、Marie Rose WongのIntroductionを加えている。再版のため、本文のページはどの版も同じだが、PrefaceとIntroductionのページについては、以下の注に何年版であるかを記した。

\**Nisei Daughter* 中の、真珠湾攻撃から強制収容所を出て大学に入るまでを描いた8章から12章を簡潔に要約した日本語訳が、英文の初版が出た1953

年に以下の雑誌に掲載されている。モニカ・曾根、山室まりや訳「二世ムスメの戦争記録—真珠湾シヤトルにこだます」、『文藝春秋』31巻第13号、昭和28年9月号、166-180。

\*引用した日本語について、『婦人朝日』掲載の二つの手記は訳者の記載がなく、編集部訳と思われる。旧仮名遣いと旧漢字だけを改めてそのまま引用した。*Nisei Daughter* は筆者訳であるが、*The Plague and I*については『病氣と私』の瀧口直太郎訳に修正を加えた。

\*現在では差別用語として使われない言い回しや用語が引用の部分にあるが、原文を尊重してそのままにした。

1. 社会学者のフランク・ミヤモトの *Nisei Daughter*, 1979年版への Introduction が挙げられる。また、Blankenship は日系人とキリスト教についての研究に、そして Fiset がキャンプ・ハーモニーでの検証に *Nisei Daughter* から多く引用している。他にも Cheung などが歴史的証言としてこの作品に言及している。そのように文献として引用されるだけでなく、Sumidaによると、アジア系アメリカ人の歴史を知る写真展や映像展で、モニカ・ソネの言葉がキャプションや語りとして使われているという。
2. Wong, xviii. (*Nisei Daughter*, 2014年版)
3. *New York Herald Tribune*, *San Francisco Chronicle*, *Asian American Art Journal* の書評の一部が *Nisei Daughter*, 1979年版の裏表紙に載せられている。また、Wong による Introduction (*Nisei Daughter*, xviii 2014年版) では、*The Seattle Times* や *Christian Science Monitor* で高評価されたと紹介している。
4. こののち、ダニエル・イノウエなどの日系議員の努力によって段階的に法案を通過させ、1988年に「市民の自由法」がレーガン大統領によって署名された。これによって抑留日系人への補償が始まることになった。

5. 後述するように、参考文献に挙げた Sumida、Yogi、辻などの議論がある。
6. 日本では、瀧口直太郎訳で1950年に『病気と私』、1951年に『卵と私』が雄鶏社から出版されている。
7. 彼女の自伝全4冊をそれぞれ短縮してまとめ、*Who, me? The Autobiography of Betty MacDonald* (J. B. Lippincott Company) というタイトルで2021年に出版されている。
8. 永岡正己「永島與八の生涯と社会的実践(2) 渡良瀬川の畔に生まれて～川俣事件まで」、『キリスト教文化 Vol.16』2020, p.103.
9. Monica Sone, xvii. (*Nisei Daughter*, 1979年版)
10. Wong, xxiv. (*Nisei Daughter*, 2014年版)
11. 戦時中、日系の文芸誌が破棄を余儀なくされ、幻の文芸誌と言われた『収穫』の全6号(1936,12~1938,6)が『日系アメリカ文学雑誌集成』全22巻の中の①として、1997年に不二出版から復刻されている。糸井野菊はその第2号から詩を寄せ、第5号の編集者の一人となっていた。
12. <https://www.legacy.com/us/obituaries/indeonline/name/monica-sone-obituary?id=24750544> (2022.8.7閲覧).

#### 参考文献

1. モニカ・ソネ「ベッティ・マクドナルド夫人と私」、『婦人朝日』朝日出版社、1952年1月号。
2. ベティ・マクドナルド「『病気と私』のキミ」、『婦人朝日』朝日出版社、1951年7月号。
3. Sone, Monica. *Nisei Daughter*. An Atlantic Monthly Press Book, Boston: Little, Brown and Company, 1953.
4. MacDonald, Betty. *The Plague and I*. Hammond, Hammond & Co. Ltd., 1948. renewed 1976. paperback edition, University of Washington Press, 2016.

- (日本語訳) ベティ・マクドナルド、瀧口直太郎訳『病気と私』雄鶏社、1950年。
5. Miyamoto, S. Frank. "Introduction to the 1979 Edition." *Nisei Daughter*. University of Washington Press, 1979.
  6. Wong, Marie Rose, "Introduction to the 2014 Edition." *Nisei Daughter*. University of Washington Press, 2014.
  7. Sumida, Stephen H. "Protest and Accommodation, Self-Satire and Self-Effacement, and Monica Sone's *Nisei Daughter*." *Multicultural Autobiography: American Lives*, edited by James Robert Payne. University of Tennessee Press, 1992.
  8. Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, edited by King-Kok Cheung. Cambridge University Press, 1997.
  9. 辻美奈子「*Nisei Daughter*に見るモデル・マイノリティの描かれ方—アメリカの人種差別構造に関する一考察」、『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻 編 (5) 2005。
  10. Fiset, Louise. *Camp Harmony: Seattle's Japanese Americans and the Puyallup Assembly Center*. The University of Illinois Press, 2009.
  11. Blankenship, Anne M. *Christianity, Social Justice, and the Japanese American Incarceration during World War II*. The University of North Carolina Press, 2016.
  12. Cheung, King-Kok. "Re-Viewing Asian American Literary Studies." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, edited by King-Kok Cheung. Cambridge University Press, 1997.

## The Background on Monica Sone's *Nisei Daughter* —Her Friendship with Betty MacDonald—

Kiiko Nagaoka

Betty MacDonald, known for *The Egg and I* and *The Plague and I*, was asked to write a new year's message for *Fujin Asahi*, a Japanese women's literary magazine. Because she was unable to send the message, she sent a letter to apologize. In her letter to the editor, she wrote mainly about Kazuko Itoi, better known as Monica Sone, her Japanese-American friend, and *Fujin Asahi* published it in July 1951. In response to this, Monica wrote "Mrs. Betty MacDonald and I", and it was published in the same magazine in January 1952.

These articles reveal that Kimi in *The Plague and I* is actually Monica, Chris in *Nisei Daughter* is Betty. They also show that Betty recognized Monica's remarkable literary talent from an early age and introduced her to the editor at Atlantic Monthly Press. Encouraged by this editor to write about her experience as a Japanese American in the US, Monica started writing *Nisei Daughter*, which was first published in 1953.

This background information makes three points that are helpful to understanding *Nisei Daughter*. The first is that Betty MacDonald's recommendation enabled *Nisei Daughter* to be published earlier than other books about the Japanese American experience in relocation camps. Secondly, these two autobiographical authors shared the same values and the courage to stand up for human rights, and influenced each other's

humor and style of writing. Lastly, their friendship helped Monica to search for her identity since Betty recognized her as both an American and as a Japanese American. Monica realized for the first time that having the rights of an American citizen and Japanese descent made for a harmonious blend at the end of the story.

# Truman Capote の “A Christmas Memory” について —作品の魅力と文体的特徴—

松 永 大 介

## 1. はじめに（作者と作品のイメージ・ギャップ）

Truman Capote は、戦後のアメリカ文学界に彗星の如く現れた小説家であり、一時はその才能と派手な言動で世間の注目を浴びたが、その後、奇行、薬物中毒のイメージが強くなり、かなり評判を落として亡くなった人物である。（なお、この小説家の苗字の片仮名表記は、カポーティとするのが一般的であるが、カポウティと表記したほうが、原語の発音に近い。）

筆者は、映画化され有名になった『ティファニーで朝食を』（*Breakfast at Tiffany's*）を20年以上前にペンギン・ブックスで購入した際、同じ本に付属で掲載されていたこの作品（“A Christmas Memory”）にはじめて出会い、その美しさに感動し、その後、この短編の舞台設定の季節である晩秋が来るたびに読みなおしていた時期がある。以来、もっと広く読まれても良い作品であると感じ続けてきている。この作品がなぜ読者の胸を打つのか、また、読者への印象を深めるためにいかなる文体的技法が使われているかといった観点から、本論考を進めたい。

なお、筆者はスコットランド在勤中（2016-18年、エディンバラ総領事として勤務）、この短編について、あるスピーチ・クラブでプレゼンテーションしたことがあるが、同クラブに所属するある米国人のメンバーには、Capote といえば「語るに足らない駄目な人物」というイメージが定着しており、スイッチが切れたように、筆者のスピーチに耳を傾ける気が、まったく起きなかったようである。自分も、テレビ番組に出演した Capote が酩酊状態で支離滅裂な

対応を行う様子を YouTube で観てはいたが、それを承知していてもなお、この作品が語るに値することを確信していたので、予定通りスピーチを断行した経緯がある。

確かに、この珠玉の作品に出てくる純粹無垢な少年である「私」と派手好きで薬物中毒の Capote の間には、イメージ上に大きなギャップがある。しかし、さはさりながらキラリと光る魅力がこの作品にはあり、それは万人にアピールするものであると信じている。

## 2. 作品の魅力の源泉

まずは、この小品のあらすじを見てみよう。「私」は7歳。遠い従姉に当たる60過ぎのオバさん（作品内で「私」が彼女を呼ぶ呼称に倣って、これ以降この女性を「ともだち」と呼ぶ）となぜか一緒に暮らしている。作品中の描写から察するに、「ともだち」には少し心の障害があるらしい。作品の中では、「ともだち」が子供時代をおくった1880年代に *buddy*（相棒）と呼ぶ親しい男の子がいたことが言及される流れで、“*… in the 1880s, when she was a child. She is still a child.*” (141)（下線は筆者、以下同様）（1880年代に彼女が子供だった頃、とは言っても彼女は今でも子供なのだが）とある（以下、和訳は筆者による）。このくだりは、子供の心を失っていないという文字通りの意味と同時に、何らかの障害があることを暗示している。毎年11月も終わりになる頃、クリスマス用のフルーツケーキを作ることが二人にとっての恒例になっており、森にペカンの木の実を採りにいき、殻をむいて暖炉で炒り、干し葡萄、さくらんぼ、缶詰のパイナップル、シトロン、くるみ、砂糖、バターなどを加えて、フルーツケーキを完成させるのである。二人は無二の親友であり、あるクリスマスの日、お互いがプレゼントした凧をあげに行き、至福のときを共有する。しかし、はからずも、それが二人が共に過ごす最後のクリスマスとなってしまう。ほどなく「私」はスパルタ式の寄宿学校に移され、さらに何年かを経た大学在学中に、「ともだち」の訃報を受ける。

この短編のテーマを単語 2 語で表すとすれば、innocence（邪心のなさ）と epiphany（啓示）であろう。後者は、enlightenment（さとり）と言い換えても良い。後々の Capote の私生活は自堕落で頹廢的であり、innocence とは無縁に見える。しかし、彼の代表作である『ティファニーで朝食を』における主人公 Holly が象徴する無邪気なるもの、善悪正邪以前の伸びやかな世界への憧れがどちらの作品においても強く打ち出されているように思われる。

次の epiphany については、幼い日の作者が、「ともだち」との凧あげを心ゆくまで楽しんだ時の彼女の述懐がそれに当たる。彼女は独り言つ。

「わたしは、病気をして死んでいくときでもなければ、神様にはお目にかかれなるとばかり思っていたよ。教会のステンドグラスから光が差し込んでくるような荘厳な雰囲気の中で神様がお迎えに来てくれるんだとね。でも、そんなことは、多分死にそうな時でもおこらない。そうではなく、すべてが今そのままにあることで、神様がいつなんどきでも、ご自身の姿を表していたんだということが、最期にからだでわかるんだと思う。・・・楽しかったきょうの思い出を臉に焼きつけて、この世にお別れしてもわたしは構わないよ。」(155)

「すべてが今そのままにあることで、神様をご自身を表している」というのは、日々の当たり前の中にもこそ悟りがあるとする禅の立場を想起させる。Capote は禅や仏教について明示的に言及することはないが、「ともだち」が語るのは、まさしくある種の靈的な覚醒である。ステンドグラスに差し込む光線は、教会堂のイメージを喚び起こすが、ある種の spiritual awareness を示すものでもある<sup>1</sup>。

なお、「神様にお目にかかる」という発想は、この述懐の前後に伏線としてつながっている。すなわち、作品の前半では、「ともだち」が毎土曜日、床下に隠してあるバッグから10セントを「私」に与え、そのカネで映画を見て来

なさいというのだが、自分自身は決して見に行こうとしないことが語られる。それは、神様と出会うときに、はっきり神様が見えるように視力を保っておかなければいけないから、なのである。また、この作品の終わり近くで、「私」が家を去り、「ともだち」と別れ別れになった後のエピソードを語るところでも頭を出す。彼女から届く手紙の中には、いつもトイレトペーパーに包まれた10セント貨が同封してあり、「これで映画を見に行行って、映画の話をしておくれ」と書いてあるのだ。

本作品のクライマックスに続く最後の部分は、付け足し、それも悲しい付け足しと言っても良いであろう。「私」は軍隊式の学校に入れられ、起床ラップで起こされるような不自由な生活を強制される。(Capoteの性格から、如何に性に合わない生活であったかが容易に想像できる。)'ともだち'は、「私」がいなくなったために犬のQueenieだけとの暮らしになるが、そのQueenieも翌年、近所の馬に蹴られて死ぬ。その後「ともだち」は寝たきりになる。そしてついに、大学に進学していた「私」に、彼女の訃報が届く。しかし、心の底において「ともだち」とつながっていた「私」には訃報を受け取る前に「虫の知らせ」があった。(日本でよく言われる「虫の知らせ」をCapoteが不思議がらずに当然のこのように書いているのが興味深い。)'ともだち'の他界を、糸の切れた凧が (like a kite on a broken string) (157) 飛んで行ってしまったのに喩えるのが巧い。かけがえのない自分の一部が失われてしまった喩えとして、幸せな凧上げの日を連想させている。本作品の最後のシーンで、「私」は大学のキャンパスを横切りながら、12月の冬空の彼方に、かつて一緒に上げた凧が見えないかどうか目で追うのである。

この作品の魅力の源泉は、人と人が深くつながり得る実例が示されていることであろう。また、そうしたつながりは、永続的なものであると同時に、さりげない瞬間に感じられるものでもある。凧揚げをしたクリスマスの日、宝石のような思い出は、「私」と「ともだち」の深い絆を示すとともに、その瞬間に実在したものであるがゆえに、なおさら貴く感じられる。

### 3. 作品の文体的特徴

この作品では、五感に訴える表現が多用されている。また、それらの表現には、詩的な情趣に富んでいるものが多い。(ちなみに、Hemingway は意図的に形容詞や副詞の使用を避けるよう心がけていたとされ、淡々とした硬質の文章を好むとされるが、Capote の文体とは対照的である<sup>2)</sup>。)

#### (1) 視覚表現

まずは、色彩表現であるが、飼い犬の Queenie の毛色が orange and white と書かれている。英語の orange がいわゆる「オレンジ色」でなく明るい茶色を表しうるのは、鳥飼久美子著『歴史をかえた誤訳』で猫の毛の色を例に指摘されているところであるが、ここでは犬の毛色を表す言葉として使われている<sup>3)</sup>。(英語の文学作品では、動植物や色彩に関わる名前や表現がよく出てくるが、インターネットのおかげでこれらを確認することが容易になったことは有り難い。)

ウイスキーを売るインディアン(今ならネイティブ・アメリカンと呼ぶべきところ)のオジさん Ha-ha の妻の髪の色は、brassy peroxide hair と表現されている。peroxide は髪の色脱色剤(過酸化水素)であり、brassy を英英辞典(*Longman Dictionary of Contemporary English*, 以下 LDCE) でひくと、having a bright gold-yellow color とある。非白人女性が金髪にあこがれて髪を脱色する例を今でも時折目にするが、1930年代のネイティブ・アメリカンの女性に如何にもありそうだと思う。

Ha-ha が裏から持ち出してきたウイスキーは、a bottle of daisy-yellow unlabeled liquor と表現されている。daisy yellow は、ひな菊の黄色だから、ウイスキーにしては黄色が濃すぎる。「ともだち」は、your finest whisky をくださいと Ha-ha に頼むが、Ha-ha は、good whisky をフルーツケーキに使うのは勿体ないと答える。しかし、こんなに黄色が濃いウイスキーとあっては、finest とも good とも思われぬ。黄色が濃すぎることは、瓶にラベルが

ついていない (unlabeled) こととも相まって密造酒であることが暗示されている。また、これと符合するように、本文中に “State laws forbid its sale.” (146) という一文が挿入されている。Capote の世代は、禁酒法時代より後になるが、なぜか州法 (Capote の出身州であるルイジアナ州法?) では、ウイスキーの販売が禁止されていたようだ。

さらに、Ha-ha は2ドルという値段を宣言する前に、ウイスキーの価値を強調するかのように瓶を陽にかざしてきらめかせる。勿体ぶっているとも言えるし、演出満点とも言える。登場人物自身が視覚効果を使おうとする実例であるが、原文は、“He demonstrates its sparkle in the sunlight and says: ‘Two dollars.’” (147) (彼は、陽の光にかざしてキラキラさせて見せ「2ドルだよ」と言う) となっている。瓶を陽にかざして見せるのは、自分の言い値を正当化する行為であろう。自分でも2ドルは高すぎると内心では思っていることもうかがえる。しかし、後述のように、結局は無料でウイスキーを譲ってくれる彼の親切さを際立たせるための作家の工夫でもあろう。

“Dusk turns the window into a mirror: our reflections mingle with the rising moon as we work by the fireside in the firelight.” (143) (日が暮れると窓が鏡になる。ともだちと僕が暖炉のそばで、その灯りをたよりに作業する姿が、上っていく月と重なって映る。) 昭和の時代には、ガラスの透明度が今ほど高くなかったためか、夜汽車に乗ると窓ガラスが鏡になって自分の姿が映ったものだが、ここでも同様の現象が詩情豊かに表現されている。「黄昏が窓を鏡に変える」“Dusk turns the window into a mirror.” (143) という「黄昏」を無生物主語にする構文にも味わいがある。

## (2) 聴覚表現

作品冒頭の Paragraph で、“Just today the fireplace commenced its seasonal roar.” (141) という一文が出てくる。「まさしく今日、暖炉が唸りはじめ『また、あの季節がやってきたよ』と告げた」というのである。暖炉 (the

fireplace) を主語とする擬人表現にもなっている。また、roar (うなり声) という比喩的な名詞を修飾する形容詞として seasonal (季節的な) を使い、「季節的な唸り声が始まった」とすることで、毎年繰り返される恒例の習慣 (フルーツケーキ作り) の到来を示している。

クリスマスの季節は「ともだち」と「私」にとっては、フルーツケーキの季節に他ならないのだが、「ともだち」はその到来をすでに起床する前に聴覚で感じ取っている。彼女は言う。“The courthouse bell sounded so cold and clear. And there were no birds singing.” (142) (役場の鐘の音がやけに澄んでいたし、小鳥の鳴き声も聞こえなかったから、きっと暖かい国に行ったんだわ。) 朝起きて目で戸外の様子をチェックする前に、鐘の音の澄み方 (聴覚) でクリスマスの季節の到来を感じ取っている。これは、彼女の感覚が研ぎ澄まされているのを示すと同時に、彼女と「私」がクリスマスを如何に待ち遠しく思っているかを物語っている。

### (3) 嗅覚表現

嗅覚表現としては、芳香としてフルーツケーキを焼くときの香ばしいかおりが巧みに表現されている。“... vanilla sweetens the air, gingers spice it; melting, nose-tingling odors saturate the kitchen, suffuse the house, drift out to the world on puffs of chimney smoke.” (147-8) (バニラの香りが空気を甘くする、生姜が空気をピリッとさせる、鼻をくすぐるかおりで台所がいっぱいになる、そのかおりが家中に立ち込める、そして煙突のけむりに乗って外の世界に流れ出ていく) と表現されている。

ところで、動詞 suffuse は、英和辞典 (『新英和大辞典』研究社) では「[液体・湿気・色・光・涙などが] 覆う、満たす、みなぎらす」と説明されており、匂いには言及されていない。英英辞典 (LDCE) にも、“if warmth, color, liquid etc. suffuses something or someone, it covers or spreads through them” とあり、「暖気、色、液体」が例示されているものの、香りは入って

いない。しかしながら、作品中の表現では香りが家中に「立ち込める」さまが、*suffuse* という動詞によって見事に体感できるので、この語の選択はピッタリと言えるであろう。(未だかつて使われたことのない構文や語法によって円滑に意思疎通できるのは何故かに答えるのが生成文法の理論だと理解しているが、一つの好例かも知れない。)

フルーツケーキの材料を買うのに必要なお金をチェックするために、床板の下に隠してあるバッグをあけると、各種硬貨の中で一番多いのはやはり1セント銅貨 (*pennies*) であった。“*But mostly a hateful heap of bitter-odored pennies.*” (145) (いやな金属臭の1セント玉の山がほとんどだった) とある。確かに1セント玉が沢山集まると独特の金属臭を発するものであり、この表現は、この臭いを記憶する読者の五感を刺激する。言い換えれば、価値のより高い *nickels* (5セント貨) *dimes* (10セント貨) *quarters* (25セント貨) より、ダントツに1セント玉が多いことの説得力が、嗅覚表現を通して1セントの特徴的な臭いを記憶する読者に対し発揮される。併せて、僅かなおカネをつましくコツコツ貯めてきたことも理解される。

#### (4) 触覚表現

作品中での触覚表現は少ないが、1セント銅貨 (*pennies*) の金属臭との対比で、無臭であり、ツルツルと滑らかな 5セント硬貨と25セント硬貨が “*Nickels and quarters, worn smooth as creek pebbles.*” (147) (河原の小石のように擦り減って滑らかな5セントと25セントの硬貨ども) と表現される。動詞 *wear* には「擦り減らす」という意味もあるが、その過去分詞が *worn* であり、「擦り減らされた」という意味になる。

## 4. 他の文体的特徴

### (1) 人物描写

Capote は良い人以外は詳しく描写しない。「ともだち」とインディアンのお

じさん（ウイスキーをただでくれた）Ha-ha 以外は、誰も人格のある人間として描かれていない。また、人間らしい描写を省くことによって、作者がそれ以外の人々に対して好意を持っていないことが暗示される。

たとえば、同じ屋根の下に、他にも何人かが住んでいるのだが、彼らについての情報はほぼゼロである。最初のページで、“Other people inhabit the house, relatives;” (141) と relatives という言葉が使われているので、何らかの血のつながりが想定されるが、“... we are not, on the whole, too much aware of them.” (141)（概して、我々ふたりは彼らをあまり意識していなかった）とされる。おそらく、純真な心を共有する「私」と「ともだち」の二人が同じ世界に住む一方、他の同居人たちは人生観がまるっきり違う世界に生きていることが推測される。

その他の箇所における、これら同居人への言及も others in the house ときわめて素っ気ない。ちなみに、これら同居人 (others in the house) は、昨夏に、蠅を25匹捕まえる毎に1セント払うという契約を二人と交わしたとされるが、歩合のケチ臭さが、そうとは言わずに強調されている。（1セント銅貨がやたらに多い理由かも知れない。）

「私」がまだ子供なのに「息がウイスキーくさい」といって同居人たちが怒鳴り込んでくる情景描写もある。だが、そうした文脈でさえも、“Enter: two relatives.” (149) と書かれているだけであり、二人との関係の詳細は分からない。こうした徹底した説明の省略が、彼らの怒りの理不尽さを余計に際立たせている。

同居人たちへのもう一つの言及は、「私」を軍隊式の学校に入れる決定を行ったのが、Those who Know Best 「何が最善であるかを承知している連中」だとされている箇所である。これは明らかに皮肉 (sarcasm) である。軍隊式生活が Capote の性格とまったく合わないことは、作品の読者には明らかであるが、同居人たちは「私」の進路を一方的に決定する。「私」に関する無知あるいは「私」の well-being への無関心が現れている。

クリスマスの贈り物の交換に関するくだりでも、作品が焦点を当てるのは、「私」と「ともだち」がお互いに何をプレゼントに選ぶかであって、同居人たちについては、the ladies, the men という漠然とした呼び方しかされないし、彼らの選んだ贈り物が如何にトンチンカンであり、相手に喜んでもらおうという気のないものであるかも強調される。

これとは対照的に生き生きと好意的に描かれているのが、ウイスキーを売るインディアンのオジさんである Ha-ha である。Ha-ha の店は夜は飲み屋になっていて、喧嘩や殺人が行われたとの噂もあり、「ともだち」と「私」は、フルーツケーキの味つけに使うウイスキーを買うために恐るおそるお店に行くのである。Ha-ha という奇妙な渾名も、彼があまりに陰気なので、皮肉を込めて、笑い声の擬音である Ha-ha がつけられたのだ。

こわごわドアをノックすると、出てきたのは何と Ha-ha 本人であった。Ha-ha は、「ウイスキーは誰が飲むのか？」と尋ねる。微笑んでいる Ha-ha を見るのは驚きだったが、フルーツケーキ用だと聞いて「勿体ない」と顔をしかめる。しかし、二人がなげなしの小銭をいっぱい集めて言い値である2ドルの代金を払おうとすると、頬を緩めて「ウイスキーはタダでいいから、あとでフルーツケーキを一つ送ってくれ」と言うのである。思わぬ優しさに触れて、二人は、Ha-ha へのフルーツケーキには干し葡萄を普通より多く入れてあげよう、と決める。

Ha-ha とのやり取りでもう一つ注目したいのは、ネイティブ・アメリカンらしい英語をどう表わすかである。お客である「私」と「ともだち」に対する彼の第一声は、“What you want with Ha-ha?” (147) であった。本来なら、“What do you want from me?” というべきところである。一人称を自分を指す固有名詞である Ha-ha で代用するのである。幼児が自分の名前を1人称代名詞の代用に使ったり、大人の側が「お母さんが言ったとおりにしなさい」とか「先生が言うことを良く聞きなさい。」などと、自分が相手に対してどういう立場にあるかを示す言葉が一人称代名詞として代用されることがある。(ち

なみに、ベトナム語にも同様の使い方がある。）

なお、脱線になるが、これはネイティブ・アメリカンの人々が実際にこのような話し方をするかは別問題であり、何がそれらしい言葉遣いと一般的に思われているかであること、場合によってはこうした言葉使いで特定の民族グループを表すのは差別的だとも捉えられかねないことに留意する必要がある。たとえば日本でも、アメリカの西部劇が流行った半世紀以上前に、日本語吹き替えで「インディアン、嘘つかない」といった「てにをは」を省いた言い方がステレオタイプとして使われていたが、そもそも西部劇に登場するインディアンが日本語を話すはずはなく、近隣国の日本語話者の話しかたとされていたものを代用したことが推測される。

## (2) 歴史的現在の活用

この短編がいきいきと読者に迫ってくるもう一つの要因は、ほぼ全編を通じて時制として歴史的現在 (historical present) が使われていることがある。(ちなみに、ほぼ全編に歴史的現在が効果的に使われている作品に、Robert Pirsig の *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance* (1974) がある。) 本作品のクライマックスとも呼ぶべき前述の凧揚げのシーンでも、“Satisfied, sun-warmed, we sprawl in the grass and peel Satsumas and watch our kites cavort.” (155) (満ちたりた気持ちで、陽にあたたまりながら、ともだちと僕は草むらで手足を伸ばし、みかんをむいて、お互いの凧がたわむれあうのを眺める) と歴史的現在で書かれている。

## (3) 日本への言及

時代設定は1930年代。フルーツケーキの贈り先のひとつがルーズヴェルト大統領 (President Roosevelt) (148) になっており、自分達の贈ったケーキをルーズヴェルト夫人 (Mrs. Roosevelt) (154) が夕食に出しているか想像をめぐらせているところから察するに、大不況後のニューディールの時代であるらし

い。その頃の日本からの輸出品なのであろう。クリスマス・ツリーにつけるキラキラ光る飾り (the made-in-Japan splendors) も本当は the five and dime (いわば百円ショップ) で日本製を買いたかったのだが、お金が足りずに買えなかった、とある。クリスマス飾りも日本がアメリカを含む世界へ輸出していた雑貨の一部なのであろう。

もうひとつは蜜柑である。蜜柑は、作品中で Satsumas と称されている。「ともだち」がクリスマス・プレゼントとして得た最善のものは、一袋の蜜柑 (a sack of Satsumas) であった。mandarin oranges ともいうが、いわゆる甘い温州みかんは、アメリカでは Satsumas と呼ばれてきたようである。筆者は、在勤したスコットランドでも Satsumas という言葉が使われるのを聞いたことがある。

いずれにせよ、戦後の日本からの輸出を象徴するトランジスターラジオや自動車などはまだ出てこない。それ以前の古き日本の輸出品である。こんなところにも、1930年代という本作品の時代設定がうかがわれる。アメリカで国内生産される柑橘類は、圧倒的にオレンジ (乃至グレープフルーツ) だと思われるので、温州みかんはもっぱら日本からの輸入だったのであろう。

さらに、「ともだち」が町で一番美しい japonicas を育てていると本文中で書かれている。japonica を英和辞典でひくと、椿 (つばき) と百日紅 (さるすべり) と木瓜 (ぼけ) が出てくるが、果たしてどれであろうか? 椿や百日紅であれば樹木なので、人が育てるというイメージに馴染まないの、ここでは木瓜 (ぼけ) のことだと思われる。

脱線になるが、『ディファニーで朝食を』には、主人公と同じアパートに日本人が住んでおり、彼の名前は Yunioshi ということになっている。日本人らしく響く名前を選んだのだろうが、ユニオシという人には逢ったことがない。今なら、念の為日本人に本当にそんな名前があり得るか確認するだろうが、本作品が執筆された1960年頃には、確認するという発想がなかったものと思われる。(それだけ、日本の存在が小さかったとも言えよう。)

## 5. 何が読者の胸を打つのか？

一言で言えば「ともだち」と「私」の間にみずみずしく通う「愛」と言えるだろう。「友情」と言い換えてもよい。二つの魂が通じ合うことの感動である。7歳の「私」と60歳を過ぎた遠い従姉との間柄であるから、恋愛的な含みは有り得ないし、だからこそ、愛情の純粹さがきわ立つ。（『ティファニーで朝食を』が恋愛がらみであることとのコントラストがある。）無二の親友どうしが同じ時間を共有することを心から楽しみあう美しさ、離れてもなお慈しみ合う美しさが、読む人の胸を打つのだ。

クリスマスの前の晩、明日が楽しみで頭がいっぱいになり眠れなくなった従姉（ともだち）が、私の寝ているそばに来て「私」の手をとって、その手が以前はもっと小さかったことを思い起こし、“When you’re grown up, will we still be friends?” (154)（大人になっても、友達のままでいられるかな？）と問いかける。これを受け、「私」は“I say always.”（いつまでも）と答える。

ともだちは、「私」が自転車を欲しがっているのを知っていて、自転車をプレゼントしたいのだが、先立つおカネがないことを苦にしている。“It’s bad enough in life to do without something you want; but confound it, what gets my goat is not being able to give somebody something you want *them* to have.” (153)（自分が欲しいものが手に入らないのでも十分嫌なことだが、誰かにあげたいものが手に入らないことは、それに輪をかけて何て嫌なことなんだろう）と「ともだち」は言う<sup>4</sup>。これだけでも、愛する相手を心から思う味のある台詞ではないだろうか。

そして、ためらいながら恥ずかしそうに、プレゼントは「(今年も) 凧なのよ」と洩らす。これを受け「私」も自分からのプレゼントも凧であることを告白し、二人は笑い合う。（ちなみに凧のプレゼントが初めてでなく過去にも同じプレゼントがあったことは“I made you another kite.” (154)の another（更にもう一つの）がそれを表している。）

今紹介したお互いのプレゼントを明かし合う一節が、クリスマス当日の

epiphanyにつながる助走部分である。二人は、一緒に凧上げをして心ゆくまで幸せを味わった。そして、「ともだち」は「この日をまなこに焼きつけて自分はこの世にさよならできる」と感じ、また神様がご自身を現してくれたと感じたのである。

本編は、派手好きで薬漬けのイメージがある Truman Capote が「無邪気なもの」「純真なるもの」を希求するという正反対の一面を持っていることを示すものである。もっとも「正反対」というのは、あくまで常識的な世間の観察者から見た物言いであって、Capote 本人にとっては、矛盾はないと考えられる。長じてからの薬物耽溺が、少年時代に味わった他者との真実の触れあいに戻りたいという願いの屈折した表現であることを誰が否定できようか？ 本作品は、Capote の子供時代の実際の体験に基づいていると考えられるが、一度触れた真実（二人で凧上げた日の幸せ）は Capote の心身のどこかに残っており、それを忘れたことは生涯なかったのではないだろうか。

#### 注

- 1 この epiphany（啓示）で連想されるのは、『ライ麦畑でつかまえて』（*The Catcher in the Rye*）で、主人公 Holden が、自分が本当にやりたいことが何なのかに突然のように気づくシーン（*The Catcher in the Rye* by J.D. Salinger, Penguin Modern Classics, pp. 179-80）である。すなわち、妹の Phoebe と同年代の子供たちが断崖絶壁の上のライ麦畑で遊んでいるのを眺めていて、万一、その中の誰かが、危ない断崖の方向に行きそうになったら、助けて元の仲間たちの中に戻してあげる役である。このシーンは、『ライ麦畑でつかまえて』に啓発されて書かれたことが明らかである庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』でも再現される。日比谷高校の生徒である主人公は、恋人である由美が将来、悩んだり悲しんだりしたときにでも海のように包んであげられるような男になろうという「自分がなりたいたいもの」に突然気づくのである（庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』新潮

文庫1995年, pp.178-9)。

- 2 Hemingway の文章に形容詞や副詞がで少ないことについては、倉林秀男『言語学から文学作品を見る—ヘミングウェイの文体に迫る』(開拓社 2018年) の pp.110-11に、形容詞と副詞の使用頻度を統計的に調査した結果が示されている。
- 3 同時通訳者である鳥飼久美子は、Agatha Christie の小説や『赤毛のアン』シリーズ等に出てくるオレンジ色の猫 (an orange cat, an orange-colored cat) が日本語でいうオレンジ色ではなく、明るい茶色を指していることがを指摘している (鳥飼久美子著『歴史をかえた誤訳』新潮文庫 2004年, pp.171-4)。

ちなみに、犬の名である Queenie は queen (女王; 王妃) に愛称的指小辞 -ie をつけた形であり、雌犬であることが分かる。作品中でも、she, her という代名詞で受けている。他方で、queenie には「同性愛者」という意味もあるようであり、Capote の性的志向と関連づけることも出来るかも知れない。

- 4 原文においても them が斜体表記 (イタリック) になっているが、これは、somebody を him でなく them で受けていることが、文法的には破格であることを意味していると思われる。しかし、ジェンダー中立性 (gender neutrality) を貫くため、性別を区別しないで somebody, someone, everybody, everyone 等を、あえて旧来の文法では破格とされる 3 人称複数 (they, them) で受けることが現在では普通になっている。

#### 引用文献

Capote, Truman. “A Christmas Memory.” *Breakfast at Tiffany’s*. London: Penguin Classics, 2000.

## The Charming Paradox of Truman Capote

Daisuke Matsunaga

“A Christmas Memory” has been my favorite story for more than two decades. Whenever Christmas season came around, I used to open my copy and re-read it. I was wondering why the it was so appealing to me, and I decided to analyze this seemingly inexplicable appeal to me. The attached is my analysis.

Truman Capote was well-known for his eccentricities. However, what shows between the lines of this beautiful novella is his yearning for innocence. Deep connection between the boy (the young Capote) and Buddy, sixtyish woman, who lives in the same house is genuine and unadulterated. Capote’s eccentricities, particularly those related to his drug abuse, seem incompatible with innocence, but despite such contradiction or maybe because of such contradiction, Capote’s longing for innocence stands out.

The other appealing factor of this novella is epiphany. Buddy’s faith is simple. She tries her best to maintain her eyesight so that she will be able to see the Lord clearly when such time comes. However, after the boy and Buddy spent a blissful time together, flying their kites on Christmas Day, Buddy realizes that the Lord has already shown Himself in things as they are. This revelation can be expressed as extraordinary awareness in the very ordinary, which resonates with Zen awakening.

Capote employs writing techniques to evoke the readers' five senses. The novella starts with the seasonal roar of the fireplace. Buddy recognizes the arrival of the season when she hears the cold and clear ringing of the courthouse bell even before she gets out of bed. The whisky (most probably bootlegged) to be used in fruitcakes is daisy yellow and sparkles in the sunlight. When fruitcakes are being made, vanilla sweetens the air, ... nose-tingling odors saturate the kitchen. All our five senses are thus pleasantly stimulated by the skillful pen of Capote and we find ourselves absorbed in the story.

Having written this essay, I feel I know better why I am charmed by this novella. I hope that the below resonates with you and arouse your interest in this lovely novella if you have not read it yet.



## 大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大坂学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大坂学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
  2. 研究会、講演会および討論会の開催
  3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
  2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
  2. 副 会 長 1名
  3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。  
副会長は会長が会員の中から委嘱する。  
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。  
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

#### 附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

## 大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
  - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
  - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

原則として、論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会が判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、2020年4月1日から適用する。

以 上

## 大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。  
     インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)
7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。  
     ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。  
     イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

## 執筆者紹介（掲載順）

永 岡 規 伊 子 経営実務科 教 授

松 永 大 介 外国語学部 教 授

## 編集後記

ドイツの哲学者カール・レーヴィットは『東洋と西洋』（未来社）の中で「東洋と西洋との差異について」論じ、西洋文化に没頭する日本人学者の生態に疑問を抱き書いて居る。「日本が西洋からとり入れたのは、その宗教的、道徳的基盤ではなく、（中略）産業と資本主義経済体制と交通制度と軍隊組織と、それにあらゆる進歩を可能にする科学的・技術的知識で」あり、「大都会に住む日本人たちは、一種の両棲動物の」如く「二様の方法で呼吸をし」、「和洋両様の服装をし」、「その両者を一人の人格において統一できるものと、その可能性を信じこんで」居る。だが、欧米に留学した日本人ですら、歳月を経て西洋の研究テーマを離れ、「東洋的伝統」の研究に戻り「関心を移していく」。西洋学問に淫する日本人は、「それを研究してどう」するのか、「一体、それがかれらにどんな関係がある」のか。西洋精神の「悟性の否定的な力」に依る「執念」が東洋には欠けて居ると評した。嗚呼。好奇心と虚栄心以外に、西洋学問に打ち込む我々研究者の内発的な動機に、一体何が有るか。

(K. H.)



---

大阪学院大学外国語学会役員

---

会 長 山 口 修

副 会 長 吉 村 京 子

編 集 ・ 庶 務 委 員 川 本 裕 未 ・ 笹 間 史 子 ・ 中 田 辰 也 ・ 平 松 良 康

大阪学院大学外国語論集 第83, 84号

2022年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

2022年12月31日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発 行 人 山 口 修

印 刷 所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

Nos. 83, 84

The Background on Monica Sone's *Nisei Daughter*

—Her Friendship with Betty MacDonald—

..... Kiiko Nagaoka 1

Research Note

The Charming Paradox of Truman Capote

..... Daisuke Matsunaga 25

December 2022

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY